

令和2年度学校だより

横浜市立緑園西小学校発行



# 緑園西

泉区緑園3丁目39番地

Tel (811) 6030

<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/ryokuennishi/>

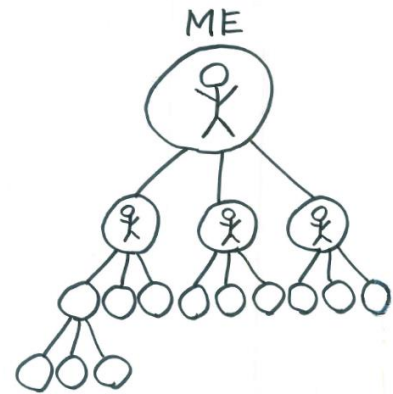
## ペイ・フォワード

学校長 立田 順一

新しい年、2021年（令和3年）が始まりました。本年もよろしくお願いいたします。

さて、昨年暮れに『ペイ・フォワード 可能の王国（原題は、Pay It Forward）』という映画を観ました。以前にも一度観たことがある映画ですが、今回、改めてDVDを借りて見直してみたものです。この映画は今から20年以上前の2000年にアメリカで制作され、翌年には日本でも公開されていますが、当時はあまり話題にはなりませんでしたが、ここであらすじをご紹介します。

…アメリカのラスベガスに住む主人公の少年・トレバーは、アルコール依存症の母と、暴力を振るう父との間に生まれました。中学1年生（アメリカの学校制度では7年生）になった彼は、新学期最初の社会科の授業で、担当のシモネット先生から、「もし、自分の手で世界を変えたいと思ったら、どんなことをする？」という課題を与えられます。他の生徒たちが、いかにも子どもらしいアイデアを出す中で、トレバーだけは違いました。彼が提案したのは、「ペイ・フォワード」。自分が受けた善意や思いやりをその相手に返すのではなく、全く別の3人に渡し、それを繰り返していけば世界は変わる、というものです（右図参照）。トレバーはこれを実践するために、善意や思いやりを「渡す」相手を身近なところから探します。仕事に就かない薬物中毒の男、シモネット先生、いじめられている同級生…。しかし、いろいろと試みてもうまくいかず、「ペイ・フォワードは失敗だったのか」と、トレバーは思い始めます。けれども、彼の知らないところで、このペイ・フォワードのバトンは次々に受け渡されていて…というのがストーリーです。映画の結末は、けっしてハッピーエンドと呼べるものではありませんが、観る者に余韻を残して終わります。



実は、このペイ・フォワードのバトンは、時間と空間を超えて横浜市内の学校にも受け渡されています。都筑区にある横浜市立中川中学校では、数年前にある生徒が、この映画を観た感想をもとに書いた作文を「全国中学生人権作文コンテスト」に応募し、法務省人権擁護局長賞を受賞したことがきっかけとなり、平成30年度から生徒会活動のスローガンに「ペイ・フォワード（恩送り）」を掲げ、いじめの防止や地域連携の活動に取り組み始めました。今では中学生だけでなく、保護者や地域の方々、近隣にある小学校の子どもたちにも活動の輪が広がっているそうです。

昨年から続くコロナ禍によって、学校教育には多くの課題、そして限界もあるということが改めて浮き彫りになりました。しかし、その一方で、まだまだ多くの可能性があるということも、映画のストーリーと横浜の中学生の取組から感じさせられました。